

# たまのよこやま

世界に一つだけのマイ縄文土器

●縄文土器作り奮闘記

●遺跡だより 75

●くろがね物語(七)

●夏休みスペシャル体験教室



## 縄文土器作り奮闘記

抽選倍率3倍の難関を突破した30名が、今年もまた恒例の縄文土器作りに挑戦。もちろん全員初めての経験。「陶芸を少し」という経験はここでは通用しない。何しろ相手は5,000年前の縄文土器。実際に発掘された本物の土器を目の前にして、早くも縄文人の偉大さにバンザイ。

しかし、そこは経験豊かな調査員の丁寧な指導の下、30名が一斉に粘土紐を一段一段積み上げていく。粘土紐はしっかりと接合すること、器面はハマグリなどでならし、凹凸をできるだけなくしていくこと。あわてずゆっくり少しずつ丁寧に。だんだん粘土が手になじんできたらしめたもの。

無口になりながらも真剣に、時間の経つのも忘れ早くも4時を回る。およその形が作り上げられたところで、粘土が乾かないように、ぬれ雑巾とビニール袋をかぶせ一日目の作業は終了。普段こんなに集中することはめったにない。心地よい疲れが残る。

二日目、いよいよ土器に文様を付ける。ここからが縄文土器の巧みの世界。この刻みはこの竹ペラで、この縄文はこの縄で、一つ一つ本物と見比べながら丁寧に文様を付けていく。縄文人は何を思ってこの土器を作ったのだろうか。

誰のために作ったのだろうか。尽きることのない思いを抱きながら、仕上げに入る。手間を掛ければ掛けた分だけ良いものが出来上がる。縄文土器が教えてくれる。

早い人は3時前に完成。手より口が一生懸命動いていた人は、ちょっとタイムオーバー。本物を目の前にしておきながらも決して同じものはできない。現代人の未熟さ故か縄文人との感性の違いか。とにかく30人全員がなんとか形になったので一安心。あとは陰干しで一ヶ月間そっと乾燥。

野焼き当日（5月20日）の天気予報は午後から雨。電話連絡の朝8時まで悩んだ末、晴れ男がいることを期待して強行実施を決定。電話連絡を受けながら野焼きの準備に入る。

径3mほどの範囲で薪を積み上げ火床をつくり、その周りに力作ぞろいの縄文土器を並べ、徐々に熱を加えていく。乾燥段階ですでにヒビが入っていた土器がいくつかあり、気になるところ。もう一つの気になる天気の方は、暑い太陽が照りつけ、野焼きの火と合わせて汗だく状態。

この間、土器焼きの横では、焼いた石の熱を利用してイモの蒸し焼き料理を調理中。サツマイモ10本、ジャガイモ8個、自然薯1本。蒸すこと1時間。全員で食す。うまいウマイ。大成功。

早めのお昼を挟んで12時過ぎ、いよいよ本焼きに入る。乾燥させた土器を火床の中に移動させ、一気に焼き上げる。まさに熱さとの闘い。炎をあげること30分。燃え尽きた薪の間から焼きあがった土器が顔を見せはじめる。割れていないか、ちゃんと焼けているか。まさにドキドキものである。そして、20年間の経験は今回も私たちを裏切らなかった。ヒビの入っていた土器も割れることなく、30個すべて無事焼き上げることができた。ここに世界に一つだけのマイ縄文土器が完成。最後に全員で記念写真を撮って解散。

すべてが順調にいった今回の土器作り教室。おまけに天気予報どおり4時過ぎに土砂降りの夕立。ホット胸をなでおろす。人生もこううまくいくといいんですがネ、と思ったかどうかは忘れましたが、そんな土砂降りの雨もまったく苦にならない心地よい気持ちで帰宅できたことに対して、土器作りに参加して下さった30名の方とお手伝いして下さったスタッフの方々に改めて感謝いたします。次回は夏休み親子縄文土器作り教室でお会いいたしましょう。

(広報 小葉)



一気に炎を上げて焼き上げる



本遺跡は、八王子市遺跡一覧のNo.49遺跡として登録され、谷地川右岸の戸吹町に所在する梶谷（津）遺跡内に位置します。縄文時代早期～中期、平安時代、近世にわたる複合遺跡として周知され、特に昭和28年に行われた都立第二商業高校の発掘調査では、縄文時代中期の竪穴式住居跡が検出されています。また西多摩の郷土史家 塩野半十郎氏により縄文時代の遺物が周辺から採取されていたところでもあります。

今回の調査は、戸吹町地内の新滝山街道建設によるもので、現在までに事業地の5,000㎡が終了し、縄文時代、古代、近世の多期にわたって住居跡、掘立柱建物跡などの遺構や遺物が検出されています。

縄文時代の成果を紹介すると、早期後半では陥穴土坑が多数検出され、この丘陵地が早期後半の一時期において、狩場として利用されていた事が考えられます。

縄文時代中期では、中期前半（五領ヶ台式）の住居跡を2軒、中期中葉（勝坂式）の住居跡1軒、土器埋設土坑（墓墳）3基、を検出しました。また至近に集石9基や遺物集中地点（土器捨て場）を検出しています。縄文時代中期の集落内における生活空間、墓域、生業などを検討する上で貴重な発見となっています。

写真1は、検出された勝坂式の住居跡です。住居の規模は直径6m程で、円形をしています。柱跡が廻り、中央に炉跡が検出されました。住居の覆土内から土器や石器が多数出土しています。建て替えが観察され、柱穴の底からミニチュア土器と石匙（写真2）が発見されています。

写真3は、検出された土器埋設土坑です。規模は全長1m弱ですが、土器2個体が土坑の片隅に埋設された状態



1. 縄文時代中期の住居跡



2. 柱穴内出土のミニチュア土器(左)と石匙(右)

で検出されています。出土した土器は、ともに器高が15cm前後と小形です。

平成18年度事業は4月から隣接地を継続して、発掘調査を実施しているところですが、平安時代の住居跡や製鉄に関係する遺構が検出され、周辺から鉄滓、<sup>ふいご</sup>鞆の羽口や土器、須恵器類が出土しています。

(田中純男)



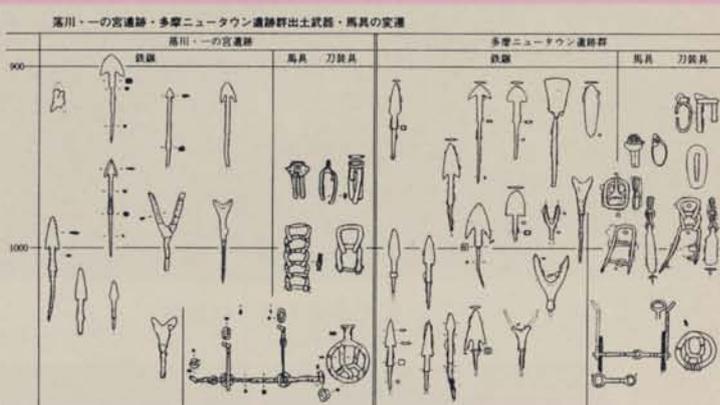
3. 墓墳（土器埋設土坑）と出土土器

# くろがね物語 一七一

## 古代の武器<下>

古代の村から武器としての鉄鏃が出土することは、前回紹介しました。そこで、多摩地域の村の調査事例をみてみることにします。落川・一の宮遺跡は多摩川沖積地に立地する大規模な集落遺跡で、4～12世紀に形成されました。とくに、平安時代には多数の建物がつくられ、初期武士団の拠点と考えられています。この遺跡では、多量の鉄鏃や馬具が見つかり、10～11世紀にかけて急速に出土量を増します。私はこうした村のあり方を「武装型村落」と呼び、他の村とは異なる性格を有すると考えています。じつは多摩丘陵の村も全体としては同じ傾向を示すことが統計的な分析で明らかになってきました。

下の図は両者の出土武器類の様子を表わしたのですが、10世紀末頃から鉄鏃型式に変化が現れます。



先が二股になった雁又式や細身で鋭利な長三角形式の実用的な鏃が主流になり、それとともに馬の轡や鐙の一部が見られます。地方の村にも「弓馬の術」が浸透しはじめ、武力を保持した勢力が多摩地域にも出現したことを意味します。また、落川・一の宮遺跡と多摩丘陵内から出土する武器・馬具には、多くの共通性がみられることから、これらを媒介とした社会的な結びつきが想定され、この地域における中世への変革のきざしをみることができます。  
(松崎元樹)

## 夏休みスペシャル体験教室

7月22日(土) 編布教室③ 午前の部 (9:30～11:30)

編布教室④ 午後の部 (1:30～3:30)

7月27日(木) 親子縄文土器作り教室② (9:30～16:00)

7月28日(金) 親子縄文土器作り教室③ (9:30～16:00)

\* 申し込み締め切り 7月10日(往復はがきで)

8月19日(土) 考古学実習－火起こし教室① 午前の部 (9:30～11:30)

考古学実習－火起こし教室② 午後の部 (1:30～3:30)

8月24日(木) 親子勾玉作り教室① (9:30～11:30)

親子耳飾り作り教室① (13:30～15:30)

8月25日(金) 親子勾玉作り教室② (9:30～11:30)

親子耳飾り作り教室② (13:30～15:30)

\* 申し込み締め切り 8月11日(往復はがきで)

7月20日～8月31日(土日を除く毎日) 夏休み考古学相談室



コースター大の古代の布を作る



火起こしの道具を製作して火起こし体験



発行

2006年6月20日 (財)東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センター  
〒206-0033 多摩市落合一丁目14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。